**第24回　一緒に考えましょう講座　2014年12月7日(日)**

**「札幌の避難者の現状　～避難から移住へ、その試み～」**

**宍戸隆子　札幌市内の自主避難者コミュニティ・桜会　代表**

**「京都の広域避難者の3年半をふりかえって」**

**西山裕子　一般社団法人　みんなの手　代表理事**

時間になりましたので、第24回一緒に考えましょう講座を始めます。

私、北海道大学スラブユーラシア研究センター長の家田です。

今日は福島原発事故から県外に避難していらっしゃる二人の方をお招きしてお話を今どのような状況になっているのかについてお話をうかがう。特に母子避難、家族で避難していらっしゃる、大変な状況と思います。お一人は札幌に避難していらっしゃる宍戸隆子さんです。こちらは京都に避難されていらっしゃる西山裕子さん、今日は京都からお越しになっています。

普通はあまり子供がいることはないのですが、今日は赤ちゃんとお子さんがたくさんいらして幸いロビーのほうが自由スペースですのでそちらのほうで、音がするかもしれませんが、ご容赦ください。

最初お二人にそれぞれ40分くらい札幌での状況、京都での事情というものをお話していただいて、そのあと、お互い同士、ネットでお二人はつながっているとのことですが、直接お会いになるのは初めてということですので、それぞれの避難の状況についてお互い同士トークしていただいてそのあと、会場のみなさまからご質問ご意見を伺いたいいと思います。一応4時までを予定していますが、それでおさまらない時はラウンジでお茶お菓子など用意していますので、そちらに移って、ご自由に過ごされるという形で続けたいと思っています。今日は北海道新聞の大西さんが取材に見えています。

原発事故がおきて4年目、　これからどういう風になっていくのか、いわゆる強制避難地区、避難指示区域については順番に帰還と言うことが始まっています。その中で実際に帰還できるのか、大きな問題になっています、ましてや県外に避難している場合はどうなるのか難しい、我々は関心を持ってどうなっていくのか日々注目していくことが最も大事だと思っています。

それでは最初に宍戸さんよろしくお願いします。

みなさんこんにちは、

はじめましてじゃない方のほうが多いように感じますが、厚別にあります雇用促進住宅桜台宿舎の自治会ですね、自主避難者自治組織桜会の代表をしております宍戸と申します。本日はよろしくお願いします。

北海道の今の事情をネットで急きょしらべてみたんですが、北海道には現在避難者登録しているだけでだいたい2500名の避難者さんがいます。そのうち1500名が札幌市、札幌集中の状況のようで、そのうち1/3がうちの団地です。雇用促進住宅というのは2020何年かには廃止が決まっておりまして、たまたま私のいる桜台宿舎というところは、札幌に住んでいた方は全員でて下さいということで空き住宅になっていたんですね、そこに自主避難、被災証明のない原発避難者が入ることになります。一時期、2011年最高の時は3000人の避難者が北海道にいました。2011年2012年くらいまでは3000人前後で推移していたのですが、2012年末2013年から少しずつ減りまして今は500名ほど減っている状況です。うちの団地もごたぶんにもれず2012年まではどんどんふえていったのですが、2012年12月に新規の避難者の受け入れを停止してから徐々に減っています。うちの団地をメインでいえば、一番多い時は7割以上が母子避難でした。自主避難者では母子避難の割合がどうしても高くなります。警戒区域の避難、強制避難区域の場合は、皆さん、どこかへ避難してくれと言われますし、賠償金もでますから、家族で避難することは可能なのですが、私も伊達市ですし、自主避難者、福島市、郡山市、いわき市など大都市圏の人たちは避難してもはじめは賠償金もでませんでしたから、どうしてもお父さんが福島に残って働く、おじいちゃんおばあちゃんもおいていくわけにはいきませんからお父さんが残って、小さな子供とお母さんがという例がおおかったです。7割強が母子避難でした。徐々にお父さんが合流するようなこともあったし、見切りをつけてこちらで家族全員が避難すると決めたということが増えてきて、2013年にはゴロゴロとお父さんが合流することが増えてきて、今はだいたい６割くらいまで母子避難率は下がっています。それでも6割は母子避難です。うちの団地の男女構成比が非常にかたよっていまして、お父さんが非常にすくないんですね、ご老人も非常に少ないです。社会福祉協議会の方や厚別区行政の方から、孤立しているお年寄りはいませんかときかれるのですが、孤立しているお母さんはいますが孤立する老人はいませんと言わざるを得ませんで。あの当時ゼロ歳とか1歳にも満たなかった子供たちが4歳になる幼稚園にはいってくる、そのとき年少だった子たちが小学生になっている状況になっています。小学校は厚別西小なんですが、私たち人数が増えたせいで、実は隣の小学校と合併の話があったのですが、それが消えました。おととしか、去年の小学校1年生はクラス1つふやしたくらい子供が増えています。近所の公園にもたくさん子供の声が響いてまして、ご近所の町内会さんのこんなに子供の声が響くのは何年振りだろう。20数年たっている古い住宅地なのでどんどん子どもがすくなくなっていたんですね。そういう点では地域活性という意味で子供が増えていると考えられます。厚別西小について話しているんですが、いきなりたくさん小学生が後は小学生予備軍が小さな子がきたので厚別西小の先生方には非常に協力していただきました。去年、厚別西小の有志の先生が私たちの住宅延長要請を道に出してくださいました。その話を聞いて非常にうれしかったです。いきなり増えた私たちですからまず地元とのつながりを何とかしなくてはというレベルだったんです。2011年に私たちが団地に入ってすぐに４棟あるんですが、3号棟の上のほうの階のドアノブに猫のフンが塗られるという事件がありまして、全国ニュースにもなったんですね。全国ニュースになる前は、なんで、いきなり廃止住宅なのに人がふえたんだ。周りに分かっていなかったんですよ。福島ナンバーが一杯とまっているけど、人がふえて、福島ナンバーばかりでどういうことなんだ。実は嫌がらせの報道があったおかげで、福島から原発避難者が来ているんだとわかってもらえたんですね、けがの功名ではありました。私たちもマスコミ対策が必要になったのと、防犯の問題もありまして、急きょ自治会を作ることになります。私たちみんな福島から来ているとはいえさそいあわせてきたわけではありません。ましてや県外避難者は一番多い時で６万人です。福島市から来てるとはいえお互い顔を知らない人たちばかりです。しかも避難すると決めた人たちは、あの人変じゃないとそういう目で見られることが多かったです。福島でも孤立していた。札幌でもうちの団地にいきなりわっと入ってきたけれども、元々ぽつぽつ、２０１１年の７月以降なんです、たくさんはいってきたのは。それ以前に入っていた人はまわりがどんな人かわからないし、なかなか声がかけられなかったし、ましてや札幌の人に話をかけることなんてできなかったんです。差別されるんじゃないかとこわくて。それじゃまずいだろうと７月以降桜会を作ることになるんですけども。自治会を作ってほんとうに良かったと私は思っています。と言うのも行政と話ができるようになったんです。避難者がばらばらだと何かしてあげたいと思っても誰に話してよいかわからないんです。北海道ではみちのく会と言って大きな避難者の自助組織があるんですけども。桜会は桜会で一時期は５００名近くの人数が集まる団地になりまして、そこがちゃんと力を持つことによって行政と対話ができるようになった。自治会にしたおかげでご近所の自治会とつながることができたんですね。私、避難者の会には絶対しないと思っていました。避難者の会にしてしまうと別物だろうな、ここに住んでいる人たちの会にするのであれば、町内会にすべきだと思って町内会にしたんですけど、今思い出して嬉しいのですが、2011年の８月に隣の第１桜台町内会でジンギスカンパーティを夏祭りでやっているんですがそこにご招待していただいて、うちの団地からかなりの子どもたちが喜んで参加させていただきました。運動会は福島では出来ていなくてミニ運動会、真夏の暑いさかりですが子供たちすごく喜んで参加しました。ただ無料で招待していただいて地元の自治会の人数より多くて、予算が予算がという声が頭の近くで聞こえているようで、もうしわけありませんと、なけなしの1万円を包んで持って行ったのですが、なんもなんも、そんなこと気にしないでいいから楽しんでいってくださいと言われました。それが今でも嬉しい思い出として残っています。それ以後毎年、第1桜台町内会さんの夏祭りには参加させてもらっています。2年目からは私たちも同じようにお金をとってくださいとお願いして参加させてもらっています。私たちの団地では避難者の女の子のダンスチームができていましてそのダンスチームが踊らせてもらったり、今年は初めて福島名物の芋煮汁を私が提供させてもらって、80名分作ったんですが、10分でなくなる、たりないじゃないかと不平不満の声が聞こえてきましたので、今年は10月に地元のよさこいソーランのチーム、と協力していただいて大芋煮会をイベントをさせていただいています。もうひとつ隣に第2桜台町内会があるのですが、そこでもうちの団地の子どもたちが参加させていただくので、ダンスチームが踊ったりします。交流させていただいています。避難者は地元に溶け込むことが必要だと思っています。そうでないとあの人たちは特別の人たちになりかねないんですよ。避難してきていつかは帰る人たち、でも北海道まで逃げてきた人間です、本当はこのまま移住も考えている人たちもいます。今までだって福島で町内会活動をしたことがあるお母さんはそうはいないんです。だって若いもの。子育て真っ最中で、地元とのつながりはお爺ちゃんおばあちゃんがやっていて自分たちは仕事をしていればばいいやと感じる方たちをどうやって地元につなげるか、お祭りはそういう点で大事だと思います。近所のお祭りには一升瓶をかついで会長にご挨拶に行くということをこの3年、4年やっています。まあうちの団地なんですが、今チームＯＫというサークルができています。はじめは町内会、自治会桜会がお茶会、飲み会を勉強会など企画をしていましたが、それだけではおさまらなくなって、自分たちで食事のことを考えていく、避難者なので食べ物のことは非常に関心があります。勉強会をしていこうとか自分たちのことをどうやって自分たちで支えていくか自発的にサークルができました、それがチームＯＫで、その人たちが地元の人たちをまきこんで、いろんなイベントを開催しています。私が今までのコミュニティの在り方をめざすんであれば、チームＯＫはサークル活動的な意味合いがつよいと思います。じゃあ、4年たって私たちの生活が楽になったかというと、これは全く楽になってはいないと思います。子供たちが地元の幼稚園、小学校に入ることによって徐々に生活の基盤ができているはずです。くらしていかなければいけないので、地元に根づいていかなければいけないから地元にねづいてきていますが、でも中途半分なんですよね、家族避難であれば、お父さんがこちらで仕事をできるのであれば徐々に普通の生活にもどりますが、お父さんが福島にいる場合、毎長期休み、夏休み、冬休み、春休みの直前は一番お母さんたちの精神状態が不安定になります。私は警戒週間と自分の中で決めていて、夜中に電話が来ても即対応できるようにと枕もとに電話をおいています。帰って来いとの圧力がそのときそのとき強くなるんですね、福島はもう大丈夫だから、おれたち普通に働いているから、ほかの子どもたちは学校に通っているし、残っているお父さんたちは、いつまで避難させているのといわれることが多いみたいですね。避難しているお母さんはあの時のままの福島がのこっているんですね。放射線量を見ても、だいぶ線量はさがりましたが、安全だとは思わない。福島にいれば、本当に下がったではないかあの事故当時から見れば無茶苦茶さがっている、だいじょうぶだ。意識のかい離ができる、仲のこじれてしまった夫婦が増えてきています。離婚に至ったケースもあります。実は家族避難の場合も離婚があります。新しい住環境になじめないお父さんはお母さんよりなじめないです。新しい人間関係を築くのは男の人は下手だと感じます。このまえショックだったのは、地元の人が七夕祭りでローソク出せをやらせてくれたんですね。地元の人から、小さな女の子に、どこから避難してきたのと聞いたときに、その子が分かんないと答えたんです。小学生なんですがわからないと。　アッ4年ってこういうことなのかと。小さな子にすると福島の思い出はどんどん無くなっていっている。それを聞いたときにすごい複雑な気持ちになりました。お母さんにすると、母子避難の家庭なのですが、福島に寄せる思い非常に強いとおもうのですが、子供は札幌のほうが故郷になりかけている。このような場合がどんどん増えてきていると思います。小学校高学年、中学生、高校生に関していえば、アイデンテティの確立という点でいえば札幌が半分以上のウェイトを占めています。いま、うちの娘は中学2年生なんですが、社会的なことをいろいろ見聞きするようになってきて学校の先生に言う言葉にすごく考えたり、傷ついたりもします。たまたま、原発が止まっているから電気料が高くなっているんだと授業で話されたことがあって、お母さんそれどう思うと聞かれて、そのことについて子供と30分ほどやりとりもしました。私たちあそこに住んで3年半以上たちましたが、周りの方たちからは、もうそろそろ自分の足で立ったらというような圧力のよう雰囲気を感じるようになっています。そりゃそうだと思います。3年もあったら人は自分の足で立てるでしょう。ふつうだったらおもいますね。ですが、避難生活の3年半、4年近くと普通の生活の４年とでは、全く時の流れが違います。ましてや、何も決まらない4年なんですよ、本当に福島は安全なのか原発事故は終わっていないのに帰ってこいと言われて本当に帰っていいのか、私たちの子どもに健康被害は出ないのか私たちに対する補償はどうなるのか、何にもきまっていません。じゃあどうすればよいのか。夏休み、冬休みの度、帰ってこい、いや帰らないを喧嘩しながら生活しなければいけない、足踏みをしながら来てしまった4年なんです。でもこのままでいいとは、私もいま思っていません。どうやって1歩を踏み出してもらうかそれをすごく考えています。前を向け圧力って前言っていたんです。前を向いていかなきゃね、そろそろ頑張っていかなきゃねという言葉にひどく避難者は傷付いていた時期があります。それは助けたいとか、生活していくのなら前を向かなきゃだめだよと言う優しい気持ちから発してもらった言葉のはずなんです。でもそれが辛かった。でもそれを辛いと言い続けるのもそろそろ限界なんです。どうやって1歩ふみだすか、で、あそこの家賃無料措置が延長になるかどうか未だ決まっていなかったときにあるお母さんが言った言葉が私の考えを変えるきっかけになりました。もし、家賃延長措置がなくなったら、私働きに出なければならない。はっ、いや違うでしょう生活立て直すためには家賃助成があるかどうかではなくそれでも働かなければ、どうやって生活を作っていくの、もちろん、あそこは最終的に最後のセイフティネットワークになる場所だと思っています。精神を病んでしまった方たちたくさんがいます。その方たちに働けというのは本当に酷です。あそこは残していかざるを得ない。私はそのために必死で頑張ります。ですが、それとは別にやはり自分の足で一歩を踏み出さないといつまでたっても苦しいままなんですよ。私たち裁判をはじめました。国と東電を相手にして損害賠償請求をしています。ＡＤＲも同時進行でやっています。これを始めることによって実は自分はどういう立場にあるのかが明確になるんですよね。なぜ逃げてきたのか、逃げてくる際にどのようなものを失い、何を購入しなければならなかったかＡＤＲと損害賠償のために聞き取りをするときに客観視することができるんです。それで、あの時のことをきっちり切り離して考えることができる良い機会なんですね。わたし、裁判を始めてから非常に楽になりました。自分の生活の真正面にあった原発事故というものを裁判というくくりすることによって、真正面から外にずらして考えることができるようになったんです。こっちはこっちでずらして考えて、もちろん考えていかなければいけませんが、生活をそれとは別に立て直していかなければなければいけない。私いま、フルタイムで働いているんですが。そういうことができるようになりました。裁判なんては怖くてできない。だってお金がもらえるようになるかどうかわからないじゃないですか。裁判するなんてお父さんがいい顔しないんです。とかいう感じの人のほうがおおいです。目の前にどんと原発事故が乗っかっているんですね。最近よくはなしをするんですが、原発事故に自分の人生を乗っ取られてはダメでしょう。自分の人生は自分の人生です。原発事故はその中に起きたアクシデントの1つなんだということをもう少し皆さん頑張って考えていこうかということで、本年度になってから未来へつなげる桜台ミーティングという新たなプロジェクトを立ち上げています。移住したいと言うけど移住するにはどうしたらよいか、北海道は気候風土が福島とはちがいますよね。各市町村によって子育て支援の在り方もちがう、プチ移住の話もあるけれど、意外と使いにくい制度で使っている人はいない。各市町村に移住するとしたらどんなメリットがあるのか本当にこっちでやっていけるのかというのを考えるのを初回やりました。2回目は生活保護の話をやりました。そこまで困窮している人たちがいます。生活保護、社会保障の制度について学ぼうということをやりました。これは結構参加者が多くいました。社会福祉士さんについだりということもやりました。つい先日11月30日にはセルフコントロール術を勉強しました。本当にお母さんたちの精神状態がやばくて、今うちの団地で私が気にしている人、本当にたすけなければ介入しなければいけない人が4名います。その方たちにも参加してもらうようにして。どうしてもマイナス思考は癖になるんですよね。全部全部悪い方につなげてしまうんですね。でも本当に私たち悪い状況だろうか、少なくとも住む場所もあるじゃん、ご飯もたべられているじゃん、子供たち学校にいけてるじゃん。それがあるだけで本当はちがうはずなんです。余計なマイナス思考が増えていくと、大切なことまで全部マイナスに考えてしまってどんどん家にこもってしまう。どうにかしてこもりかけている人を外に出すかということを頑張っている状況です。このセルフコントロール術をもう一回やってもいいなあと思っています。参加された方が最後には元気になってくれたので。こういうことをしかけていく人が必要なんだな。私自分がやっていることがすばらしいとか頑張っていると一切おもいません。試行錯誤の連続です。これをやったら100人のうち一人が振り向いてくれかも知れない、その100人のうちの一人を繰り返していくしかないんですね。3年目でむすぶばもなくなってしまって、どうやって避難者の支援をしていくかというのは避難者当事者の声を聞かなければずれていくんです。今もいろんなイベントに招待していただきます、コンサートにきて下さい、演劇をみに来てくださいなど、いろいろあるんですが、それはうれしいし、たのしいし、ありがたいのですが、でもそこに報われない人たち、そういうのにすらでれなくなっている人たちをどうしていくか。避難者のために何もできていないから避難者のために何かしたいんですと言われたときに、実はこうしてほしいとは私も今言えません。それは避難者として対応することではなく個人個人の困ったことに対応しなければいけなくなったからです。生活にたいしては、今までの生活保護とか生活困窮者の対応が必要になってくるし、ＤＶに関してもそうですよね。既存の専門としてやっている方の相談するほうがよい状況になってきている。避難者支援として大きなひとくくりでやることはもうすでにないのではないか私は思います。自分たちの自助組織として自分たちで立ちあがった人たちが活躍していけるのが一番だと思います。ただ、問題があります。そこには大きな落とし穴があります。うちの団地、すごく羨ましがられたんですよ。支援する側としても大きなレスポンスがほしいから、まずうちの団地に打診があるんです。そうするとどうして桜台団地ばかり特別扱いするの。桜台は私もいるし、ほかに頑張っているおかあさんなどがいるので、自分たちでイベントを企画するんですよ。そうすると桜台ばかりなんでイベントがあるのということになる。もし私が中央区でイベントを企画して、人は集まるかというと、これが集まらないんです。そんなことを言うのなら来てくれたらいいのにと、内心ぼやいてはいたんです。私たちは本当に北海道の中でも恵まれた避難者だったんですね。だけどその間、個別に避難した人たちはどうしていたかというと、普通にその土地の生活になじんでいくんですよ。札幌以外の避難者さんは地元になじんでいる人が増えていくんです。札幌でもそうですよ、うちの団地以外の個別の方は地域になじんで小学校のＰＴＡをやったり普通の生活をしています。でも私たちは隣を見たらいるのは避難者なんです。これは良くないなと。避難者同士で助け合うというのは当初はすごく大事だった。でも生活者として生きていくときに、隣も避難者だと、私たちたいへんだよね、かわいそうだよね何とか頑張って生き抜いていこうね、それはいいんだけど、普通の生活にはなかなか結びつかない。移住したいと思っていても、あの団地からそとに出ていきたいというお母さんは今、非常に少ないです。これは本当、良くないと思っていて、家族避難者でこちらで自立していこうという方は少しずつ出ていくんです。支えあえるからこそあの場所にいたい、小学校ならもう転校したくないという子供たちもいますし、あたりまえですよね。無理やりひっぱってこられて知らないところに放りこまれてようやくなじんだのにまた転校などしたくないです。ようやく気心知れたご近所さんができているのに新たな1から人間関係を構築するのも大変です。だからあの場所に残りたいというのも分かるんです。でもあの場所にいる限り私たちは避難者から抜け出すことができないと思います。もう来年のことだけ考えている場合ではないなと私は考えています。5年後10年後を考えることは私たち非常に難しいことなんです。だって家を建てたって、仕事をしたって、また原発事故でチャラになってしまうかも知れない、それだけの恐怖を私たちは味わってきたんです。だから未来のことは考えられない、でも長期のことを考えながら目の前のことをこなしていかないとすごく刹那的というか行き当たりばったりの人生になってしまいます。将来を見通せないと、人は病んでいくのだということをすごく感じるようになってきました。だからどうせ、どうなるか分からないからと思考を停止してしまうと本当に荒んでいくんですよね。その公害を止めるためにもあそこを残していかなければならないと思いながら、あそこを早く解体したいんです。そういう思いのままに来年私が自治会長を続けることはできないなと思っています。だって私はあそこをなくすべきという考えが半分あるから。難しいんですよ、立ち上がれないほどに打ちひしがれている人がいる、何とか前を向いていこうとあがいている人もいる、その人たちをいっしょくたにすることが私は出来なくて、さっきも言いましたように100人のうちの一人に何とかなったらいいなというイベントなりなんなりを積み重ねていくしかない、そうでないと対応しきれない、そんな状況です。やっぱり避難者だから、私他の人に言われたらそんなことはないと言うんですけど、私、避難者だから言うんですが避難者としての甘えがある。それに避難者が気づかなければいけない。原発事故だけが災害ではないです。ほかに北海道でも札幌でも苦しんでいる人たちがいる。何とか自力で頑張ろうとしている人もいるし、誰かの手助けを受けて生活していこうとしている。私たちはそのことを見つめないといけないんですね。何とか自分たちは特別ではない、そういうところに避難者に気付いてほしい。いろいろ話したいことがあって、ばらばらになってしまいましたけど、もし後で質問いただけたら、それにこたえる形でお話しさせていただければと思います。

最後になりますが、私たちがこういう目に逢っているのはたまたまなんで、同じようなことがもし泊原発が爆発したら北海道でも起こります。ましてや福島県200万人、札幌市200万人です。福島県民全員がそろってなんて出来なかったのだから札幌市もできません、ましてや後志からのたくさんの避難者を抱えてこちらにその避難者と一緒にどうやって避難するか考えると非常に大変なことになると思います。私たちがどのように生きているか、どういう生活しているかは、もしかしたら、未来のみなさんの姿かもしれません。何に苦しんでいるか、何をなくしたのか、それでも何をめざしているか。そういうことをもし機会があれば、たくさんの避難者さんと話してほしいと思います。私は避難者の中のたったひとりです。避難者がみんな、私と同じ考えをもっているわけではもちろんありません。そうやってたくさん話しをすることで、気づくことが、避難者以外の目線が大事だってすごく思うんですよ。気づくことがたくさんある。支援の対象者としてではなく、隣人として友人として避難者と付き合ってほしいということを良く最近は言わせていただいています。友達ができるのがやっぱりうれしいですよね。友達がいることが人生の支えになります。だからみなさん、もし避難者さんと会うことがあったら友達になってください。支援者，被支援者という関係ではなく友達として付き合っていただけたらと思います。

長くなりましたありがとうございました。この辺で私の話は終わります。

（スライド１）

みなさんこんにちは。一般社団法人みんなの手代表の西山裕子です。

今回は家田先生と機会がありまして、大阪で2年くらい前でしたか知り合いになりましてそのときからずっと連絡がなかったのですが、久しいぶりに来てくださいということで、それじゃ行きますということできさせていただきました。北海道に着いて2日たったんですが、今日5歳の娘ときたんですが、2年間福島に住んでいて今5歳なんですが、2歳の時避難して彼女の中には福島県の冬になると雪という風景がやはりあったのか、雪が大好きで、北海道に行くというとアナ雪の雪だるまを作りたいと、二人で歌を歌いながらきました。昨日着いた時は雪がなくて今日雪が降っておおよろこびで、よろこんで、私も北海道に避難すればよかったなあ。京都は寒いと言っても雪がないので何が一番と言って雪のないのがとても不満なんです。何か帰ってきたという気がしました。私も福島県福島市からの避難者です。2011年3月18日に福島市を離れまして、先ず東京のほうの西多摩郡瑞穂町というところに避難しました。そこでおばの紹介でアパートに住みまして宍戸さんとおなじように自主避難者なので、支援というものがありませんのでアパートを借りて住んでいたのですが経済的に、主人が福島におりまして、経済的な負担からどこか無料で受け入れ住宅があるところはないかなとさがしておりました。2011年の5月に福島へもどったんですが、一時的に物をとりにかえったのですが、本当に室内活動だけで、室外で遊べない子供たちの姿を見て、やはりこの避難は長期化するということ、やはりいろいろな情報から野菜についても東日本の野菜は、その時点では、食べられないかと思いまして、西日本のほうに避難できたらなとおもっていました。そんなときネットで京都に避難した方のメールをみました。調べるところによると、京都では3月15日から福島県からの自主避難者を全員受け入れていると聞きまして2011年の6月、高速道路無料化の最後の日に東京から京都に行きまして当時2歳の娘と私と、父と、母で京都に移動いたしました。そのときから今まで京都で主人とは離れた生活をしております。私が住んでいますのは、伏見区の公営住宅なんですが、今宍戸さんのお話をききましたら何か似ているなと思ったんですが、そちらは公務員の住宅だったんでけれど、取り壊しが決まっていまして公務員の方は翌年全て退去しました。最初は公務員さんが入ってたところだったんですが、一緒に公務員さんと避難者が一緒に住んでいて避難者が誰かわからない、つながりたいなあと思っていました。そこでしたことは8月なんですが2011年の8月にそこに住んでいる方々にポスターを書いて、つながりませんかということで。最初のミーティングをしました。そのときに集まった避難者がいて20世帯くらいの避難者がいてその方たちと一緒に避難者の有志の会を立ち上げました。2011年の夏が、一番避難者の方々が特に福島から避難された方が多くて、初めて来られる方が多く、私は6月に避難していたのでその方たちのニーズを聞きながら、先ずは私たちはここにいると発信をしました。多くの支援者の方々、多くの地域の方が避難者の方に何かしたいということで、私たちの会に連絡してくださいました。いろいろな支援物資であるとかイベントへの招待であったりいろいろいただきました。2011年8月に立ち上げた公営住宅の避難者有志の会ですけれど、立ち上げから様々な問題がありました。何か、先ずは会費を払うか払わないかということ、それから反原発、脱原発ということを発信しないでほしいというようなことがありました。私はそのとき代表をしておりましたが、原発避難者、自主避難者イコール脱原発ではない。政治的な運動はしないでほしいというようなことがありまして最初からかなりいろいろなことがありました。そしてその後なんですが、先ほども宍戸さんの話にありましたが、いろいろ支援が集まってくる伏見区の住宅はすごくいいね、ラッキーだね。ほかに避難されている方のもとへはなかなか支援が行きとどかない。そのなかで私が思ったのは、私たちの住宅の方だけではなく京都に避難されている方全員に支援が行きとどくシステムが必要なのではないかとおもいました。そこで立ち上げたのが、みんなの手という会です。この会は私が住んでいる避難者の住宅の避難者を対象にしたものではなくて京都に避難されている方、違う住宅の方でも、関西の方でも私たちの情報、みんなの手の支援をほしい方はどなたでもということで手を広げました。2011年の12月にみんなの手という会をたちあげましたが、今年の3月11日に法人化が必要になりまして、一般社団法人という法人になりました。構成メンバーは福島県、茨城県、宮城県からの避難者それから地域の支援者から成り立っております。目的なんですが、とにかく避難者のニーズに従った支援活動をしよう、こちらは自助組織ですから自分たちが支援という言葉を使ってしまいますが、自分たちを救っているわけだから支援ではないかもしれないけど出来る限りのことをしようと思っています。

(スライド２)

前置きはこのくらいにして、京都の避難者支援の状況についてお話しようと思います。先ほどお伝えしましたが、京都府には京都には関西全域の関西広域連合というグループがありまして、知事その当時、大阪の知事、滋賀県、京都の知事などがあつまりまして、東日本大震災の支援をどうするかを決めたところ京都府が福島県の担当になりまして、山田　　知事の気持ちですね山田知事が福島県は全域を受け入れようことで避難区域外の避難者も受け入れるということで、宮城県・岩手県・福島県、ほかに千葉県・茨城県・栃木県こちらは地震の被害と言うことで一部の地域の避難者を受け入れていました。２０１２年１２月２８日まで受け入れのほうは終了しております。

（スライド３）

こちらが避難者の状況に関してなのですが、今まで累積をしていきますと1000名以上，1412名491世帯の避難者を京都府、京都市が受け入れをしておりましたが、その中で皆さんいろいろな状況で変わっていまして、現在のところ、京都府それから、京都市で把握している人数ですが、避難区域の方が484名190世帯の方々が避難をしている、避難の受け入れをしているという状況です。（前のスライドにもどして）この数字以外にも関西には東京、神奈川であったり様々なところから避難されている方が東日本から避難されている方がいまして、避難者登録というのがありますけれど、それによると1000名以上と言われています。この方たちが住んでいるわけですが、今これからお話させていただくのはこの避難区域、京都府で指定されている中で受け入れている方々のことを避難者としてお話させていただきたいと思いますが、京都府、京都市の受け入れ区域は、山科区・伏見区・洛西地区などの公営住宅、京都府下などに避難者を受け入れています。山科区、伏見区、洛西地区などが避難者が多く住んでいる地域になります。私が住んでいる伏見区なんですが、現在69世帯の避難者が住んでいます。先ほど聞いてびっくりしたんですが、うちのほうでは半数が母子避難が多かったわけですが、今は家族で住んでいる方が4２%ということは58%が母子避難者と言うことで、やはり関西は福島、宮城、東北から遠いということがありましてどんどんお父様も移住される方が多くて母子避難者の割合も58%くらいになってきています。ではこのような避難者をどのように支援しているかと言いますと京都府がかなり積極的に避難者の受け入れをしていました、避難者支援をおこなってきました。それから民間支援団体が熱心に活動を行っています。京都府には東日本大震災避難者支援プラットホームという会がございまして、こちらでは支援団体とかが月に一度集まりましていろいろな話をしています。主な活動としては避難者の交流会それから発送便、月に2回ほど避難者に京都府から郵送物が届けられます。そこに例えばいろいろな方々が招待したいなど、それから私たちが出している新聞なども入れさせていただいています。まあ民間支援団体もたくさんあったのですが、どんどん縮小化して主なものがＮＰＯ法人なごみさんであったり、関西全域ですがぐるっと東日本さん、そしてＮＰＯ法人一歩の会、そして私たちの団体など、どんどん、どんどん少なくなっておりますけれど民間の支援団体としてはサロン的な事業、避難者の相談であったりサロンの開設、なごみさんは情報の発信などが主な支援内容です。

(スライド４)

避難者のニーズもどんどんと変わってきています。2011年震災後に多くの方が避難しておりました。そこで一番最初に必要だったのは物資的なニーズでした。たとえば冬はガスファンヒータであったり、子供用の服がほしいであったり物資的ニーズがありました。それから、福島の線量の高い時期にいたということで、甲状腺がんにならないかどうなのかというみなさん不安をもっていました。すぐ、京都の民医連さんにお願いいたしまして甲状腺の検査を致しまして、150人、2012年3月に時点で、150人くらいの子どもたちの甲状腺の検査を受けることができました。それから避難者同士の交流が必要だということで、マスコミの宣伝もあり多くの避難者交流会には避難者が参加しておりました。

2012年になりますと住宅の受け入れ期間が短い、延長しないか延長にならないかという不安がありまして、これが幸運なことに毎年毎年延期になりまして来年も住めるわけなんですけど、とにかく将来に対する不安が深まりまして、被災者支援法が可決されましてこれに対してすごくみんなが期待していたわけなんですけど、政権が代わり民主党政権から自民党政権になりまして、実際、私たちが目に見えるものとしては高速の無料化ぐらいしかない他には何も決まっていない状況が続いています。どんどん長期避難によりストレスや将来に対する不安が募ってくる。特にお母さんたちの間から聞こえてくるのは、子供と向き合う時間がすごく長くなって、今までは暴力をふるわなかったのに手を挙げてしまうようになった。というような不安なども聞きました。それから経済的負担がどんどんかかってくる。2013年になりますと、周りからのプレッシャー、避難をするのか、帰還するのか、帰還というのは避難元に帰るということですが、帰還を選択しなければいけない。福島県に還ったものの、宮城県にかえったものの、そこに住んでいる方と確執を感じる。いつまで京都にいるの帰ってきてもいいじゃないの、安全だよ、福島は普通の生活をしているよ、というような確執が、どんどんうまれてくる。それが家族でもそうですし、家族の間、近所、コミュニティ、友達の間でも、どんどん表面化していく。

（スライド５）

そして2014年ですけれど、まあ今後どうなっていくかわからない未来に対する不安が、

それまで、どうするの、どうするのであったものが、どんどん離れていく中で家族の問題が表面化していく、離婚される方もいらっしゃいます。夫婦間の問題がある、それからおじいちゃん・おばあちゃんからいつ帰って来るのということで帰還に対する圧力が周囲からかかる。住宅はいつまでいられるのだろう、一年延長になれば、そのとき半年くらいは落ち着いているのですが、また次、また次と毎年毎年繰り返される。というようなことが今までふりかえった中の、避難者の不安だったり、ニーズを拾ったわけですが。このようなニーズがある中で私たちがどのような活動をしてきたのかについてお話したいと思います。

（スライド６）

みんなの手の活動の主な活動、私たちは避難者もいますし、京都の地元の方がいらっしゃいます。私たち避難者が中に入っているという事でやはり避難者同士ニーズが分かる。それぞれどんどん個別化していますが、個別化しているというニーズも分かる。避難者のニーズが分かるのでとにかくニーズに合わせた支援をする。それからいつまでも私たちは避難者として甘えていられないので、とにかく自立してほしい、自立しなければいけない、自立支援。それから避難者への発信、だけではなくてこれもそうですけれど地域の方々に知っていただく。福島のことだけではないんだよ、あなたのことなのよ、私たちみんなのこと、日本人全ての問題であって、世界の問題であってという発信をしなければいけない。ということとやはり、そこに移住するのでもないにしても私たちは京都のコミュニティに住んでいるからコミュニティ作りをしていかなければいけない。避難者のコミュニティではなく地域のコミュニティを作らなければいけないということと、最後は私たち故郷を離れていますけれど、故郷を捨てて来ているわけではない、故郷とつながりながら、何か私たちが故郷に対して出来ることをし続けなければいけない。ということでこのようなことを主な活動としています。ダッと書いてあって結構大変です。かいつまんでお話するのにダッと行くとたいへんなので、写真をみながらお話させていただきます。

（スライド７）

活動ハイライトとして、福島と京都を結ぶ活動であったりのことのひとつですが、子どもたちの夢の夏プロジェクトということをしています。これのきっかけは、２０１１年ですね避難してきた子供たちが何を言ったかというと京都へ来て思いっきり遊べるのはいいけれど、福島に住んでいるお友達と離れてしまった。友達に会いたいから福島に帰りたいという声がありました。そこでかんがえましたのは、同級生再会プロジェクト、福島の子供たちをよんで、避難してきた子供たちと再会させて両方がリフレッシュできるというようなプロジェクトをおこなってきました。

(スライド８)

これは写真なんですけど、２つのプロジェクトがある (スライド７にもどし)、家族再会プロジェクトがあるんですけど、毎年、盆と正月に京都福島間のバスを走らせています。こちらもプロジェクトはほとんど助成をもらっていないので(またスライド８の写真に戻す)、

助成金をもらわずに出来たかつどうなので、このように京都の繁華街で募金活動をしたりしています。今年は運よくセイブドチルドレンのほうから助成金が出きまして、夏のプロジェクトができましたが、ほとんどが民間の力で、人々の力で、善意で行って来ている事業です。

(スライド９，１０で写真をしめす)

このように多くの子どもたちが京都にきまして、今年は京丹後のほうに行きまして、丹後の海を思いっきりエンジョイしていただきました。今年の冬もバスを走らせていきたいと思っています。ただ、今資金の面をはなしましたが、資金面でかなり大変です。というのは、１回バスを走らせるのに５０万円かかります。値上げがありまして７０万になりました。７０万をどうやって寄付をつのるのかなかなかむずかしくて

(スライド１１)

今年は福島県に帰還支援事業にお願いしましてこちらのほうの助成金を申請いたしまして、ふるさとにつながろうツアーという形で福島県の復興の状況を見る、状況確認、福島の今を知る集いということと福島の方々、他の地域に避難者している方々との交流会をいれるという形で、福島県のほうから５０万円ほどの助成金をいただきました。それによって、京都府からの推薦状という形でかなりのバックアップがあったんですが、走らせることができました。こちら４７名くらいいただいているんですが、毎年盛況で、４０名４５名、たまにはキャンセル待ちもあるほどにこのバスを利用していただいています。昼便なので小さなお子さんも一緒になって乗っていける、と言っても朝８時にでて夜８時のだいたい１２時間くらい乗っていくわけです。かなり、北陸道をとおって、ただ、いろいろ工夫をしていて、仲の良いお友達同士、近くの席に座ってもらたり、休憩をとりながら北陸の素晴らしい景色を見ながら避難者さん同しの交流もしながらということで、毎年楽しみながら帰っていただくツアーをしています。多分、もしかしたら今年で最後なのかも知れないと思っております。このような活動をしています。

(スライド１２)

それから次が、やはりコミュニティ作りが大切ではないかとコミュニティ作りをしています。こちらは、北海道のむすびばさんがありまして、そちらと同じフランス財団のほうから支援をいただきまして、カフェの立ち上げには助成金をいただきました。そして他にはニュースレターを発行しています。

(スライド１３)

ニュースレターのほうは毎月１回から２回、避難者の方々に出しております。支援じょうほうだったり、私たちの活動、みんなのカフェで行うイベントについて避難者の方々にお知らせしています。４７号出ていますから今まで４７回避難者さんへ京都府の支援便を通して送っております。また地域のかたからのイベントへのお誘いがあると、こちらに情報を載せまして避難者さんへ発信しています。これは福島から京丹波に移住してくる方の畑作りをお手伝いした時の写真です。

(スライド１４)

こちらが七草がゆのご招待がありまして、避難者の方々と一緒に参加したりとか、いぜん、最初のころですが、わたりシチューぽかぽかプロジェクトというのがあったんですけれどこちらのほうの募金をみんなでしたりとか、京都フィルハーモニーの夏川ゆみさんと歌おうというところに避難者の方々と一緒に参加したりとか、このようなことを情報便に載せましてみなさまに招待などしています。

（スライド１５）

こちらなんですが、みんなのカフェをオープンしました。先ほども言いましたがフランス財団の助成を持ってこちらをオープンさせていただきました。

(スライド１６)

ここができてよかったのは、このようなイベントをすることができている。みなさまにこちらのほうお配りしましたが、みんなのカフェはみんなの広場としてこのようなイベントをしております。こちらは地域の方は９００円くらいドリンク付きで参加できます。避難者の方は無料で参加できるようになっています。避難者の方にはプラス、鍼灸マッサージであったり気功クラスであったりのワークショップなども加えて参加していただいています。

（スライド１７）

とにかくここをオープンしたときにポイントになっているのは、とにかくほっこりできる、のんびりできる、くつろげる、ほっこりは京都弁なのですが、それから、手を動かしたり、体を動かしたり、まなんだり、いろんなことができるスペースということで、リラクゼーションもかなりとりいれていて、スピリアチル系のものであったり気功であったり鍼灸マッサージであったりと、とにかく避難者の方にリラックスしていただこう、いつもそこに行けば何かできるスペースにしたいと思っています。

(スライド１８)

避難者さんの就労支援ということでパソコン教室なども行われていました。

（スライド１９）

これは子供たちの英語クラス、キッズイングリッシュなども行っていました。避難者の方は300円で地域の方々は750円くらいで参加できます。ここで地域の方々と避難者の方がたとのコミュニティつくり、子供たちのコミュニティが何とかできないかなあと思って頑張っています。

(スライド２０)

これは私が実は英語の講師だったんですが、通訳とかしていたので私が英語を教えています。多くのの地域の方がいます。地域の方、避難者の方が一緒に英語を学んでいます。

(スライド２１)

これは東京から避難されて来た方が主催して行っている詩のクラス。

(スライド２２)

福島に帰られた方も、京都に行くときには行くわと言ってよく遊びに来てくれます。

（スライド２３）

これは福島県からですけど、避難者支援課の方がたまにですが状況確認ということで来ていただいています。

(スライド２４)

すごいデザートですが、実は本格的なカフェです。皆さんにカフェのチラシもありますけれど、かなり本格的にやっています。

(スライド２５)

これが"ずんだ"なんですけど。ずんだのティラミスで、東北では枝豆をつぶした餡がありましてそれを、おはぎとかおもちとかにかけてたべるんですが、それを何とか京都で広めたいとおもいまして、これはパティシエに作ってもらったティラミスです。すごくおいしいです。

(スライド２６)

ずんだのチーズケーキも作っています。

(スライド２７)

会津の輪っぱ飯と、いか人参、柿あげとこれは福島の味ということで、このようなものを提供しています。

(スライド２７)

みんなの手については、とにかくこれからどうなるか分からない避難者に対しての県外避難者支援、やはり次の課題は自立、新しい1歩を踏み出すためにどんなことができるか、それに対して試行錯誤をしておるところです。やはり私たち一番何かというと、原発事故は起こってしまった、私たち福島県民が自分たちの使命として、だから私たちは暮らしと命を守っていかなければならないということを発信する。私たちが身をもって得た体験を発信していかなければいけないかなと思っております。暮らしと命を守れるようなそんな社会になるために頑張っていきたいと思っています。それをするためにも、避難者と地域の方々とのコミュニティ作りをしつつ、その中で故郷を忘れず、故郷にできること、逆に離れているから出来ることをしていきたいと思っています。

(スライド２８)

こちらのプレゼンの資料は終わりなんですけど、最後にまとめをしていきたいと思います。

いろいろと京都府の場合、行政が中心となって最初の時点から避難者支援に携わってくださっていました。そこでまとまった中で、ほかの民間団体もすごく動いておりまして、たとえば、ＡＤＲであれば京都市の弁護士会がかなり連携をとって避難者支援をしておりまして、ＡＤＲをまとめて皆さんの面倒をみてくださっている。裁判に関しては、うつくしまふくしまというようなどちらかと言えば政治的な団体ですが、かなり音頭をとって皆さんに情報を流してくれる。情報に関してはなごみさん、グループ西日本、生活支援に携わっている1歩の会とうちのほうも生活支援になるのかなあと思っておりますが、そのような形で行っております。相談に関しては京都府、なごみさんであったり。もうひとつは先ほどの宍戸さんの話とリンクするのかなあと思うんですが、それぞれの公営住宅にはそれぞれの自治会があります。山科ではシャキョウさんが入りまして茶話会などを行いまして、月に1回ほどみなさんが集まっている。それから向島笑顔つながろう会というのがあって、これも自助組織なんですが、そちらでまとめてみんなで避難者が交流する場がある。それから私の住んでいる公営住宅でも自治会がありまして、公務員さんがいるときには公務員さんも入っていたんですが、公務員さんが全て退去されたので、今は避難者が全て自治会をしております。でもどちらかといえば、自治会のファンクション、機能としては避難者支援のほうではなくそこの住宅で生活するのにどういうことをしていかなければならないか、例えば、全体的な町内会的な役目をしております。避難者支援の部分があまりかぶらないような形でやっているのかなあと思います。洛西のほうにも公営住宅ユ―アール（ＵＲ？）があるんですが、そちらは京都市のうけいれですが、こちらのほうも避難者支援、避難者の団体があります。このように見ますと、自治会の組織がある、避難者の団体があるそして行政がつなぐような情報発信などをしている。そして民間の支援団体がある、すごくバランスのとれているのではないかと思っています。

そして、うちの団体なんですけれど、そして私の話をさせていただきますと、こういうチラシであったり、かなりかかっているなあとか、北海道まで来て宣伝しているのかと皆さん思われるかなと思うのですが、大変なんですこれ。助成金というのは、すごい話しをさせていただきます、趣旨と離れてしまかもしれませんが、助成金というのはそのときはいいんですが、フランス財団のむすびばさんはどうかわかりませんが、作る時はいいんですが助成金はそこで止まってしまう。そこ運営するためには並大抵ではない努力が必要で、結局はｶﾌｪを作ったらという話だったんですけれど、避難者のつどい場、コミュニティ作りとすごく格好はいいのです。実はカフェは飲食店なので維持するのがすごくたいへん。私はこれで10年くらい年をとったじゃないかと思うくらい大変な思いをしています。自分の想いとして、やはりみんな3年8カ月たちまして、どちらかと言うと今お話をきいてましてふとかんじたのが、京都の避難者はちょっと違うのかなとおもったのは、私たちは700キロはなれているということは自分たちも風化しているんです。放射能の話しを避難者同士が集まっても話すことはない。病んでるというはなしでしたが、病んでいる人いたかなという状況です。京都にいてよかったなとやっと分かったんですが、うちの主人と話していて、何で京都にいたいのか理由がわかったんです。それは放射能から逃れるからではなくて、放射能のことを気にしなくて普通にしていられるんです、普通に生活しているんです。カフェのことを考えて、芋煮の季節になると芋に一緒に食べようと話すんです。放射能のはなし、何ベクレルだの話をしないで済む。普通の生活ができるということがよくて、そして避難者の間でも、最初は本当に交流会であったり、相談会であったり参加がおおったんですが、それがどんどん激減してきて、参加もない。本当の避難者支援って何が必要なのかが分からない。それは個別な支援なのかなという気もしているんですけれど、ですから私たちはサロンでサロン事業をしておりますけどこれもどんどん形を変えていかなければならないのかと思っています。ですが、ただ、私の想いは最後500人避難者が500人おりますが、500人一人一人移住がきまる、福島へ帰るその日までいつまでも寄り添っていたい。まあ自分も当事者なのでそういう気持ちがあります。関西700キロ離れていると震災などなかったことのようなそんな風化がすすんでおりますので、風化をさせない。自分たちの問題としてとらえていただくと発信していかなければいけないなと思っております。それともう一つはやはり今後ですけれど日本というのはこんなに自然災害が多かったのかと今年、つくづくと実感しておりますが、おなじ京都でも被災地があります。被災地がうまれました。まだ被災地の復興がおわっていません。そんな中で私たちだけが被災者なんだという意識を取り除いて、逆に福知山に、逆に丹波に自分たちが被災者支援に行くという気持ちを避難者の方に持っていただきたいなと私は個人的に思っています。バスを1回運航するために50万、1年間運航すると100万かかるわけです。それをわたしが、避難者の私があつめてくるわけなんですが、これは並大抵のことではないんですけれど、西山さんいつ走らせるの、いつ今年は運行するの、であったりとか、このようなリフレッシュキャンプをすると、いやーご飯がまずかったあそこのはね、逆にどんどんもらい慣れしてしまったのではないかな、してもらって当然という避難者の意識があるのではないかなとこれ危機感じゃないかなと思っています。そしてまた、そのような中で自分はいろいろなことを発信して、冒頭にお話ししましたけれど、最初に避難者だけど脱原発だと言わないでほしいと言った避難者がいました、そのときから私はこの会を通じて色んなところどこ行っても脱原発という話はしたことがありませんし、政治的に偏らないで行こうとおもってきました。それは何かと言うと、わたしたちは、私は、ただの5歳の子どもを持つ母親で、たまたま事故があって京都に避難しただけであって、政治的な活動をするために自分のキャリアがあって今まで生きてきたわけではないし、政治的な活動家、社会活動家として思われたくない。ただ一人の人間として、母親として自分たちのニーズをお伝えしたり皆さんに私たちが体験したことを共有したいだけである。そしてまた、多くの避難者が、政治的活動がしたい方はしていますし、ふつうに静かに私たちはお母さんたちは普通の生活をしたいだけだという避難者もたくさんいます。ですから私は政治的活動政治的なことは、話さないでおこうと心がけています。ただ、ＡＤＲのこと、とにかく京都ではかなり専門分野はわかれているので、政治的な活動はこちらがしている、生活支援はこちらがしている、かなりやりやすいんですけど。ただ自分の中では自分は避難者なので、忘れないという発信をしつつ、避難者のニーズを皆さんにお話しつつ、みんなの手をみんなのカフェを続けたいと思っております。これから質問、セッションになりますので、何かもしもあればお聞きしていきたいなと思っています。本日はいろいろとこの会を立ち上げるのに、開催するのにご尽力いただいたと思います。ありがとうございます。ありがとうございました。

トークセッション

＜宍戸＞西山さんのお話を聞いて非常に共通点が多いとおもいました。やはり距離があるんじゃないかとおもいました。私、山形の避難者さんとも情報交換をする機会が多いのですが、山形だと、すぐに帰るという方向への避難者さんの気持ちのモチベーションのほうがたかいんですよ。今京都が700キロというのを聞いて、もしかしたら同心円上に避難者の気持ちが変わっているのではないかと感じました、羨ましいのはストレスが持ち込まれていないというのはすごく羨ましくて、たとえば、これがもしかしたらうまくいったのではないかということがあれば教えていただきたいですね。北海道の避難者は本当にやばいのです

＜西山＞どういうところがストレスなんですか

＜宍戸＞やっぱり、帰る帰らないということを考える母子避難者としてのストレスは大きいし、それと食べ物へのこだわりが非常に強い方が多い。食べられないものが増えてしまうので、そのへんなのかなという気がするんですが、

＜西山＞食べるものに関しては本当にないんです西日本のものしか。西日本のものと北海道のものが入っているくらいです。ほとんど入ってこないんです東日本のものは。先ほどいいましたように、何もかんがえなくていいんです。選択肢としてないです。

＜宍戸＞それがあるかも、北海道は冬、葉物野菜は関東になるんです。それは結局ストレスの原因の一つになるかなと思います。

＜西山＞それからコミュニティというか、なかが、少ないんですがそれぞれの住宅にコミュニティができていてその中でお友達もだいたいできていて、みんなで、避難者と集まらなくてもお友達として会話ができ地域の方々と集合体ですが、幼稚園、小学校をつうじてでとが、避難者の中でもお友達の輪ができていて、それなりの社会的なネットワークがそれぞれができていているのかなと。

＜宍戸＞それは私たちもできているのですが、

＜西山＞でもちがうんですよね。

＜宍戸＞ちがうんですね。

＜西山＞ただ、やはり帰る帰らないということは皆さん、私もそうですけど、かんがえてはいるんですね。ただ多くの方が、それは北海道はどうかわからないのですが、離れれば離れるほど住めないという思いが強くなればなるほど、遠いと思います。

＜宍戸＞それはそうですよね。

＜西山＞どちらかといえば、京都のいるかたは、半分帰らないという思いできている、それをだしている家族もそれもいいんじゃないか京都まで行かせるくらいなので、もう帰ってこなくてもいいと言っている方もいらっしゃるし、逆に帰らなきゃだめだとなった場合にはみなさん、いろいろ言いながら帰られるとおもうんですね。あとはご主人が来るかとなのかとおもいますね。どうしよう、福島は安全になったから帰ってもいいのかなというような方はいないですよね。福島は帰れないとの思いの方が多くて、家賃が今かからない、受け入れ期間が延びれば延びるだけいようということと、もしだめな場合はおかあさんがかなり、最初の時期はそうなんですが、一人でしんどくて子供を育てられない方は早い時期にお父さんにプッシュしてお父さんがこちらに来られるということが最初1年目に問題になった方は2年目にはお父さんの数がどんどん増えて来てというように初期の段階でかなり問題解決している。どんどんお父さんはこちらに来られている。ただ、私もそうですが、一般的に見て、大丈夫だなと思っても、心の奥はわからないですよ。心の奥は実は抱えている問題はみんな一緒なので、でてるかでてないかで、これから私が気にしているのは、いまよりは、受け入れ期間が本当に終了した場合やはりホントどうしようかと決めなくてはならなくてバッとそこに問題が生じるのではないかと思っています。

＜宍戸＞お仕事はどういう感じなんでしょう。お父さんの仕事はすぐにきまっていますか

＜西山＞京都では京都ジョブパークというのがあって、そこが結構積極的に就職の案内をしていて、そちらは避難されている方でも避難毎に色んなお父さんの情報を、お母さんが行って情報登録をしてそこで逆にお仕事を探して下さるんです。お父さんのプロフィールとかで探してくださって、ここの事務どうですかの形で、すごく積極的にさがしてくださる

＜宍戸＞それはすばらしいですね。お父さんの仕事がないということが、お父さんの来れない原因の一つになっているので、

＜西山＞それから京都府のほうでも京都市のほうでも、緊急雇用の紙が回ってくるんですけど、そちらで移住されてくるお父さんが1年間とかお仕事をされる。ジョブパークの紹介で働いているお父さんもいらっしゃるし、お父さんの場合は、介護職とかやはりどこでも仕事があって転職をして介護職で採用、その場合は年収が減るので、半分くらいになった方もいる。そのこともあって、受け入れ先の住宅の延長を望んでいる方もいらっしゃいます。ジョブパークいいですよね。

＜宍戸＞ジョブパークいいですね。うらやましいです。

＜西山＞ぜひぜひ、北海道でもジョブパークを行政機関ですが、ハローワーク系の行政の機関ですが、北海道でも。ただ、京都の場合、範囲が小さいので、北海道はすごいですよね、数が。こうなるとむずかしいですね。

＜宍戸＞それもあるとおもうのですが、

＜西山＞逆にこれくらいならば、行政も動きがいがあるじゃないでしょうか。

＜宍戸＞何回かハローワークで就職相談会をやってもらったんですが、なかなか避難者の足がおもいんですよね。それがなかなかうまくいかなかった原因でもある。福島と北海道特に札幌では職種が違いすぎてそれがなかなかうまくいかなかった原因のひとつでもある。工場がないんですよね。

＜西山＞あ～あそうですよね。これからは避難者支援はないっておっしゃっていて、個別に対応していかなければと、わたしもそうなのかと思っています。避難者支援団体というのができていて京都でも関西でもあって、やはり支援ということを色んな会でも話し合われたりするんですけど個別に対応することが一番難しいのではないかと思ってます。言ってますけれど、じゃ個別にというのはどうやって支援するのかな。ただ私もすごく考えるのは福島の人口が200万人くらいいて、震災後には195万人くらいになり、その中で多い時で県外避難者は6万人くらい、私たちはマイノリティなわけですよね。確かに事故がなければ、東日本大震災がなければ、私たちのような、私は京都にくることもなかったんだろうと思うことはあります。その反面、この間仙台に行って、花は咲くをみんなで仙台の被災者の方たちと歌ってきたんですけど宮城県ってもっとひどいなというふうな、福島だけでなく津波の被害者は家もなくなって、新しい家を建てるのは自分でお金を出して立てなければいけないという状況を見て来てすごい大変だなと思いました。今、自分も西日本にいるから、地産地消で西日本の野菜を食べていこうと思いますけど、マクロビオテティックなどしているので、だからと言って福島で頑張っている方がたくさんいて農家さんもかなり打撃を受けているし、福島で不安を持ちながら子育て支援をしている方がいる中で私たち県外避難者、広域避難者がそんなに求めててもどうなのかなと思う所がありまして、外に出れた、受け入れしてもらったそこで何も気にせずに、例えば福島にいたらいろいろ気にして水をどうしよう、ミネラルウォター買わなくちゃそんなストレスになるわけです、そこで生活しているだけでストレスだと思うんですよ。表土を削られたサンドバッグみたいのがあるだけでストレスだとおもうんです。福島に住んでいる、宮城に住んでいる、被災地に住んでいるそれだけでストレスだとおもうんですね。だけど私たちはそこから離れられて、まあ家族がバラバラということはあっても安心した暮らしが出来るということはそれだけでありがたいなとおもったら、避難者支援としてパッケージ見たいな形でしてもらうのはどうなのかなと思う所があります。やはり優先順位を国でも決めていただいて1番東日本大震災で困っている方を優先的に支援してもらいたいなと思っていて、自分なんか主人と離れた生活をしていますが、京都にいていろいろ支援を頂いてめぐまれているな思っていてと、だからこそ避難者は早く自立して、被災地である自分の故郷を、福島県を、宮城県を特に福島県ですけど、なんとか頑張ろう、なんとか福島県のために尽力できるまでにそこまでなってほしいと思っているのですけど。今、なかなか食べるものがないという話をしましたけれど、私は二つのきもちがあって、私は別に福島の物は食べてもいいなとおもっていて、子供にはやはりわからないので、食べさせたくないというなという思いはすごくあるのですけど。自分はいいかなと思っているところは結構あって私たちが福島を離れただけでもラッキーなのに、この私が京都にいて、福島の野菜を食べないでくださいといって頑張っている福島の人に対してなんか風評被害、そういう意味の風評被害ですよね、というのはおなじ福島県と言っても広いので会津とかは線量が低いのもそうだし、風評被害をまき散らせてはいけないなという部分があって私、すごく複雑なんですよ。

＜宍戸＞複雑ですよね。

＜西山＞複雑なんです。私はいいけど、こどもはね。あの時福島全域避難だったらともかく残っている方々がいるなかで、私たちが離れて、その方たちに対して足を引っ張るようなことをしてはいけないなという部分とやっぱり福島のものだとひいてしまう自分がいて、特に子供にはと言うのがあって、ここが葛藤のあるところです。ごめんなさい脱線してしまって。

＜宍戸＞そこが本当に悩むところなんですね。私も福島のものは食べないことにしています。私が食べたらと子供がたべるので、私は食べないようにしています。じゃ、どこまで気にするかというと、私は割合とゆるいほうで、あったら食べるし、そのゆるさが許せない方から、宍戸さんは甘いと批判を受けることもあるし、それぞれの選択を尊重するしか本当はないと思うんですよ、食べるということに。福島に残るという選択も尊重しなければと思っているし、福島をでる選択も尊重する、それぞれがそれぞれの意思でしたことをお互いが認めあえるようになっていかないといけない、みんな苦しくなってしまうと思っていて。避難者していますが、福島に本当に仲良くしてくれている現場で支援している人たちもたくさんいるし。想いは割合一緒じゃないですか。福島がたいへんだ、宮城が大変だ、西山さんは多分先頭を切ってずっと走ってきたから、多分よくすごく見えるんですよ。私もたぶん先頭をきらせていただいたので、そこから見える景色で、私たち避難者だけが特別大変ではないということに行きついてしまうじゃないですか。それを避難者にも伝えていかなければということになっていくんですよね。

＜司会者：家田教授＞

ありがとうございます。じゃ今度は会場のみなさんからお話を伺おうと思います。1つばかり付けくわえさせてもらいますと、中京大学に西本さんという社会学者がいるんですが、今、彼と共同研究をはじめているんですが、まさに彼は残った人たちを対象にした研究をしています。中通りで、福島と郡山の中間地帯なんですが、そこで2008年に生まれた子供を持つ家庭を全部調査するということをやっていて、その結果としてどうかというと、ホント何も変わらないんですね、外に自主避難していても避難していなくても考えていることはどういうことをかんがえているか良くわかりました。そういう食べ物に対する思いもそうですし、子供のこともそうですし、外に避難していても中にとどまっていてもお母さんたちはほとんど同じことを考えている。お互い同士、区別は、外に避難したから、自分は避難しなかったからということでは全くないということがよくわかりました。今日のお話で最後に外に出たから特別に大変なのではない、そこのところは実際残っている方、数から言うとおおいわけですが、今日お伺いしたことは実は、残っている方たちも全く同じことを考えているのだと思います。もちろん違うこともあるでしょうが、少しつけ加えさせていただきました。ご質問、ご意見ありましたら、できるだけ手短にお願いします。

＜質問＞

すみません、僕も母方が福島と宮城なんですよ。だから他人ごとでないわけです。お二人に質問なんですが、きっかけとして原発災害から避難するということであっても事実として避難とか保証の問題がありますけども異境の地に集団で移住したということだとおもうんですね、そういうことは日本ではあまりなかったような気がして、たとえば、映画になっているものなんかで言うと北海道に本州のほうから幕末に移住してきた吉永小百合主演の北のゼロ年というのがあるんですけど、これくらいかなと思います。で、バンクーバの朝日っていう映画が上演されて、これはカナダに行った移民が向こうで野球チームを作って受け入れられていくという前向きなは映画ですが、そういうふうに海外に移住、ハワイとか南米に移住、ブラジルとか、そういう例はあっても国内でこれだけの移住はあんまりなかったと思うのですが、ここで一つそれぞれにお聞きしたいのは、僕は札幌にずっと住んでいて、井の中の蛙なんですよね。だからたとえば、京都の人たちの、一概に言えないのかもしれないけど、その気質というのは想像するしかない部分だけど京都の人は札幌より都市の歴史が10倍くらい長い古都ですよね。札幌、北海道は開放的だと先入観があったのだけど、糞尿なすりつけ事件みたいな排外主義的ないやがらせがあったのは、地元に住んでいてショックだったんですねえ、北海道はそういう変な古臭い部分があるんですよ、だけど冠婚葬祭などは例えば分家、本家そんなのはあまりないし、お金かけないでやるという移民が作ってきた文化がある。一方京都については閉鎖的な部分があると思っていたが若者が多くて開放的なところがある。福島からそれぞれのところに行ってそれぞれの都市の印象とそれぞれの住民の開放的だったのか閉鎖的だったのかを伺いたい

＜宍戸＞嫌がらせはあったにしろ、私は北海道はすごく友好的で開放的で大好きです。わたし、北海道はすごく息をしやすいなと思っていて、福島は割合と本音を表にださない風潮があるんですが、北海道の人は本音しか出てこないような感じがあって、それが楽です。それがかえって辛いという人がいて、何でこんなこと言われなきゃいけないのとへこんじゃう人もいましたけれど、そういう点では楽だなと思っています。

＜西山＞二つあるんですが、まず、集団で移住したのはなかったとお話ですが、そういうことが起こったんです。別に私は海外にも住んでいたんですけど、自分の仕事をしたところが仙台と東京なので、大学も東京でしたので、そこまでしか東日本はそれくらいだなとおもったんですが、あの時に、最初の段階で300キロ離れなければいけないと東電の社員の中では300キロだといわれていた。あなたなら小さな子供をもっていて、テレビ・マスコミでは何も大丈夫と言わているけど300キロ離れなければもう危ないといわれたら、300キロを見たら、岐阜じゃないかというそういうことが起こったということです。集団でたとえば日本人もあちこち海外に働きに行きましたけど、そういう選択ではなくて、1日か2日の間に300キロ離れなければもしかしてすごいことがおこるといわれて自分は東京は超えたくないと思っていても東京を通過して300キロいかなければいけないとそういうことが起こったんです。という認識を皆さん持っていただきたくて。それで私、原発から100キロ、300キロでどこ住もうかなと思ったときに、北海道だと角のここ？一番東のここしかないじゃない、京都だったら和歌山の海のところ、東南海地震が起きたら津波でやられるだろうなというところしかないんですよ。ノーチョイスなんですよ、皆さん。そういうぎりぎりのことだったんですよ震災の時に。皆さんも起こりうるかもしれないんですよ。あそこ場所分かんないですがぎりぎり東のあそこ（宍戸；しべつ辺りです）、100キロじゃ済まない300キロとなると皆さんどこへ行くんでしょうということがひとつと、京都なんですが、京都は観光都市と言われるようにおもてなしなんですね、おもてなしの心をもっているので、いわゆる私たちは福島の人なのね、お客さんなのねという対応をしていただいた。おもてなしのこころで接していただいているのかなと思います。ぶぶづけの話もありますが、最初から最後までずっとお客さんなのかな気持ちもします。それからあと、私、東日本の中にいますけども京都は政治的に言ったらかなり共産党が強いのかなと、共産党と、民主と自民党が全部くっついている共産党以外は全部くっついている。すごい事がおこっている議会でも。共産党が強いということは、共産党の新婦人の方がいたるところにいます。脱原発、原発に関しては思いを持っておられる方がすごくいらっしゃるので、おもてなしの京都人の気質だけでなく私たちはすごく受け入れてもらっています。そして私なんかも色んなところに引っ張りだこで、市長選、知事選がありましたけど、そういう時に共産党の議員が出ると福島県からの避難者は引っ張りだこになるというような部分もあるのかなと思います。

＜家田＞ありがとうございます。

＜質問＞食べ物のことなんですが、北海道にも福島産のコメが出回っています。市場に出回るという以上は安全だと確認して出していると思って買いますが、お二人はそれでもたべないですか

＜宍戸＞一応、全袋の全体検査をしています。100ベクレル以下であれば出荷がＯＫになっています。100ベクレルを安全だと思うか思わないかだと思います。私は申し訳ないですが、食べないです。それは個人の考え方です。

＜質問＞100ベクレルのものでは安全ではないと?　私はそういう知識はなかったので。

＜宍戸＞100ベクレルというのは震災が起こる前までは、100ベクレルを超えたものは黄色いドラム缶に詰めて放射性廃棄物にするレベルです。(質問者；え～～)。100ベクレルに近い物を出しているとは思いません。20ベクレル30ベクレルのものは出荷しているんです。

＜質問＞ようするに放射能ゼロではないということ、それはたしかだということですね。

ええ、ゼロのものもありますよ。測れる機械によっては10ベクレル以下は測れなかったりしますから、３ベクレル、5ベクレルでＮＤとなるんです。検出できない。それを食べてもいいと思うか思わないかは、本当に安全かどうかではなく個人の問題になっていってしまう。

＜質問＞だけど、放射能ゼロの食べ物ってないですね。

＜宍戸＞今までは、0.00何ベクレルがほとんどでした。それが1ベクレル、2ベクレル、3ベクレル、何10ベクレルまで来たものを、私は食べるなとはいいません。私、個人で判断してくださいとしか言いようがないです。

＜質問＞わかりました。すごい参考になりました。

＜西山＞全量検査していないということもあると思うんですが、うちの場合は無農薬のものがいいんです。別に原発とは関係なく。無農薬・有機となると、福島のもので無農薬・有機となると、私以前から福島のお米はたべていなくて、無農薬・有機ということになるとおのずと選択肢がなかったというのが先ず、私の事情であるんですけど、震災後にカンダチェフスキーさんの研究レポートを見た時に、10ベクレル以下のものでも食べるとたとえば不整脈がふえたりとかということを、これはチェリノブイリノの子供たちを検証した結果をデータを早いうちに見まして、ですから安全ということは厚労省が決めることであって、安心というのは主観的な言葉なんです。自分としては安心ではないから100ベクレルではなく自分のなかでは10ベクレル以下でもなくゼロベクレルと思っています。その中のバックにある論理としては、あえて、あえて選択して危険性というかリスクのあるものを選びたくないなと思っています。やはり、ヨーロッパの研究機関というかアカデミックな考え方であったり、アメリカのアカデミックな考え方はすごく違うので、誰がどの考え方を選ぶのかはそれは選択、皆さんによるとおもうし、それからもうひとつは福島だけにこだわらずに、これは福島のものだけではなく放射能は同心円上に広がったわけではないので、他の地域、放射能で見たときに福島の米ということではなく、原発の放射能の影響を受けた地域と言うことを話していきたいと思っています。福島だけの話をしているわけではないよね。

＜宍戸＞もちろんそうです。長野あたりでも、キノコは出荷停止になっています。だから福島だけが問題ではない、福島のコメは全量検査しているけど、茨城、宮城はどうなの、してないんですよ。福島県に全部にかこつけちゃう、福島県だけにとどめてしまう、そのほうがむしろ問題だと思います。

＜質問＞私、あえて福島産だから買ったんですけど。

＜宍戸＞それは個人の考えとしてありだと思います。福島食べて応援ということは、福島のお米、いま、北海道のお米より３割くらい安いんですよね。（質問者；安いって・・）安いからではないことは分かっています。安いということは農家さんにはお金が言っていないということ、食べて応援と言うけど買いたたいていますからね。それでお金をもらっていないのに食べて応援してるんだと言われても福島の人にとってはなかなかそんなつもりどうなんだろうとあると思います。

＜西山＞もうひとつ福島って言っても福島県広いので、どこの福島なのということも考えなければならない。

＜宍戸＞そうですね。

＜西山＞後やはりこれは私の本当の意見なんですけど、測っていると言ってもセシウムだけなんですよ。それしか測れないんですよ。ほかのものは測れないんです。

＜宍戸＞そうです。セシウムとヨウ素くらいで、他の核種はまったく測ってないので、例えばプルトニウムとかウランとか落ちていますから福島には。(西山；福島だけではない)それを測っていない。南関東、北関東、東北のかなり上のほうまでおちていますので、測ってないのは安全だからではなく測れないんです。

＜富塚＞食品のセシウム汚染について活発に意見が交換されたなと思います。私、札幌で市民放射能測定所、食品の放射能検査をしています。それで、3.11の後、食品が大丈夫なのかどうか考えていったときに日本中どこでも、例えば外食であるとか、加工品、冷凍食品というところに買いたたかれた、値崩れをおこした食品、お米であるとか野菜とかが大量に流通していると考えています。チェリノブイリの時も事故の直後大量に被爆をされた方がいっぱいいますけれど、そのあと10年後にもういちど食品の汚染というのが、皆さんの忘れたときにおこって、体内にずいぶんセシウムが事故直後とおなじくらい堆積されたという知見があります。そうすると西山さんのお話をうかがって一つは西山さんが事故の前からマクロビオティックということで大変食品に気をつかわれていたので多分、京都に移住されてからも同じように食品に気をつかわれて食事をしていると考えると、あまり事故前と事故後でストレスはないのかなと思ったのですが、500人くらいの方が今京都に引っ越してこられていてあまりストレスはないんだと言うおはなしでしたが、冷凍食品であるとか外食とか普通の食事をすると考えると、かなりおなじように札幌の人と日本中の人、福島に住んでいる人を含めて、同じようなリスクがあるのではないかと私はかんがえていたんですね。そこらへんはいかがでしょうか

＜西山＞冷凍食品はたべないのでなんですが、全国チェーン店のお店があちこちにあるので難しいと思いますけど。そこらへんのところが難しい東日本のものがわざわざ輸送コストをかけて西日本に来ないというのが前提として気持ちのなかにあって、同じ外食産業であっても、冷凍食品は別ですが、わざわざ来ない。モスとかファストフードは別なんですが、こないという安心感があります。たとえば、近くのお惣菜屋さんでも見てると地元の野菜であるとか、京都は京野菜というのが売っているので、地元の京野菜と言うのがネームブランドになっていて、おなじ外食するにしても選択肢がそういう部分で広がるのかなと思っています。ちなみに、うちのカフェでは西日本の野菜しか使いませんと表記していたんですが、今は地産地消でと、京都―関西―西日本という感じでしておりまして食材を得るのも難しくなく、普通の努力で手に入っています。

＜宍戸＞ちなみに、月1回、スナック桜台というイベントをうちの団地でやっていますが、ほぼ北海道産のもので賄えます。これからの季節、葉物野菜はきついですが、サトイモとか南のほうでしか取れない物は九州産を選んで買うようにしています。北海道を選んだ人たちはおなじなんですよ。食べられるものが多い、そうそう選ばなくてもストレスを感じないと北海道を選んだ人が多いです。

＜家田＞ありがとうございます。

＜質問＞非常に抽象的な質問になってもうしわけないんですが、福島に寄り添うとよくいうじゃないですか。もっと広く言うと原発事故によって被害を受けた所に寄り添って、それに寄り添うって一体なんなんだと、ずっと考えてきて、例えば、食べる食べないの問題も、私、郡山で農業をやっている友人がいて、実は喧嘩をしまして、食べる食べない、作るべきなのか・作らないべきなのか、食べるべきなのか・食べないべきなのか、それとか私も市営住宅に住んでいるんですが、隣に1年か2年くらいおそらく避難して引っ越してきた方がいたんですが、何も声をかけることができないままにその方は福島に戻って行かれたか別のところに越して行かれたのかわからないんですが、どういう関わり方ができたのかずっと考えてここまで来ているんですけど。どうなんでしょう

＜宍戸＞福島に寄り添うの福島はどこでしょうね。私も分からないです。皆さんが言う福島が実はどこかわからないという経験は非常にたくさんしていまして、福島に行かれた方から福島は大変だという話とすごく復興しているね、と両方の話を聞いてどっちも福島なんですね。福島は一つではないということを言わせていただいて、私がイメージする福島と、皆さんがイメージする福島は多分違うんですよ。漠然とした福島に寄り添うことはできないと私は思っています。個人に寄り添うことはできますよね。そのとき仲良くなって福島の人だからではなく友達として付き合ってほしい。郡山の方と喧嘩になったことは悲しいことですね。私も避難者として福島の人と喧嘩することもあるし、お前なんか帰ってくるなと言われることもすごく多いので。ただ、自分の想いを言い合える間がらになれるのが一番だと思います。けなすのでもなくなんでもなく心配しているということをただ伝えれば変わっていくんじゃないかなあ。お米作らないと買い取ってもらえないから補償金が出ないということもあるので、作らないと補償金でないんですよ、だから作らざるを得ない。それぞれ販売するのは仕方ない、作るのは生きていくために仕方がない、それを受け取る方がどの選択をするのかも自由だとそこで折り合いをつけていくしかないのかと思います。

＜西山＞良く京都でも、福島は忘れない、福島に寄り添うとキャッチコピーに使っているんですけど、宍戸さんは富岡町の出身です、うちの父は相馬の出身で、母は岩木の出身そして主人は岩木の出身なんでけどよ。小さいころから福島市から相馬市に抜けて相馬市から海岸線を抜けて岩木に6号線を伝っていくんです。私は海が好きで若いころはボディボードもしたので、大隈とかの波を求めてさ迷ったこともあります。中通りに生まれ育ったんですが私にとって浜通りは自分の第２の故郷で私の性格って浜のひとだよねとこの前いわれました。そんな風にルーツは浜通りだと思っています。中通りで早く言えば60キロ離れて原発の事故が起き、北西の風がふいたからうちのほうも汚染されてしまった。私たちのことでないのになによ、と思っている浜通りの人もいるけど、私はそれだけでなく浜通りがルーツの自分からするとそれだけじゃない思いがすごくあって、私たちが福島県民もそうですけど日本の国、今年配の方もいらっしゃいますけど原発を作ってしまった、何もわからず原発を作ってしまった私たち、そしてわたしたちの親世代それによってこういうことになってしまいました。こういうことというのは強制避難区域２0キロ圏内30キロ圏内が帰還支援になっていますが、その区域が住めないんですよ人が。何10年も、もしかしたら何100年も人も住めない区域になってしまったんですよ。それについて皆さんどう思っていますか？福島に寄り添うってどうなのかなというくらいの質問なんですよ。おなじ日本人として悔しくないんですか。悲しくないんですか。私は確かに福島第1原発に行ったことがないんですけど、ただ、６号線を通って今はもう入れない区域の風景が浮かびますけど、私たちは、自分も生きていた時に原発があったわけだから、反対運動もできたわけですよね、何だって出来たんですよ。もう少し東電って100回以上も今までも事故を起こして、何度も福島県も何とかしろと言ってきたわけだから、そういうことに対してもっともっとプッシュできたのに何もしないで無関心で何もしなかった。こういうことになって、おなじ福島県の中の20キロ圏内が、海も山も素晴らしい景色があってみんなが住んでいたあそこが、飯館村の農家さんが頑張っておいしいものを作っていたところが住めない地域になってしまった。それは私の悲しみ、故郷を失った私の悲しみでもあるけれど日本人として皆さんの悲しみであって、苦しみであって悔しさでなきゃいけないんじゃないですか。どうなんですか、皆さん。日本人として例えば北海道だったら北方領土問題がありますけど、こちらがロシアのもの日本のものと争っているけれど、そうじゃなくておなじ本土で、北海道はそうじゃないかも、日本の国土とされるところの部分が多分100年は住めなくなったということは自分たちの国土を失ってしまったということは日本人全部の喪失感でなくてはいけなくて、その悲しみ、苦しみ、くやしさ、何なんだろうと、そう思うことが福島に寄り添うということです。福島のことだよね、あんた達かわいそう、避難者さんかわいそう、被災者かわいそうねと言うことではなくて、福島、なんで、沖縄の問題もそうですが、何でなんだろう、私たち失ってしまったんだ、住めないんだよ、あの景色見れないんだ、そしてその中の最終処分場にするか中間処分場にするかみんなでかんがえて、ある人の故郷ですよ、生まれた故郷を私たちどうしようかあそこを最終処分場にしたらいいんじゃないの、中間処理場にしたらいいんじゃないのとそんなことを話しているんですよ。故郷を失った人がたくさんいるんですよ。福島県は福島県のものではなく皆さんの国土なんです。だから私は福島に寄り添うとか寄り添わないとかいう言葉が大嫌いで、忘れないんじゃなく、寄り添うのではなく福島のことは私たちの問題で私たちの国土をどうしてくれるんだとみんなで国に訴えるくらいでなきゃいけないと思います。

＜質問＞原発を認めたのがそもそもの間違い。私は４0年近くボイラーをやっているんだが、原発もボイラーみたいなもので燃料がちがうだけ、だからいずれ事故が起きることはわかっていた。家族にもいっていた。みんな間違っている。（聞き取りにくいところを以下のように、司会者がまとめる）

ただいまのお話は50年くらい前に原発を始めたんだ。それをはじめたのは私たち自身なんだ。認めたのもわれわれ、事故によって被害を受けたのも我々なんだ。あなたたちが被害を受けたのではなく我々すべてが被害を受けたのだ。

＜質問＞こんにちは、私は本州から自主避難をしてきました。関東からきたので本当に自主避難です。その前はキログラム当たり１２00ベクレルくらいまでＯＫという核実験しだらけのアメリカからきたのでこれは国土だけの問題ではないし、日本人以外もいっぱい色んな人が住んでいる日本だとおもうので、多様な意味での問題だなとおもいました。お二人の貴重なお話をうかがって、行政が受け入れているところで、助成金がでるとかそういった枠組みはやはり必要なんだなと感じました。当事者の人たちにこのような測定の話ですとか考え方の話ですとか全部それが福島の人たちだけに負わせなければいけないというのは大変な状況だなとおもいました。今このお話を聞いていてとても胸の痛い思いをしました。私の母親は茨城で津波の被害にあいました。普通のピーマンでも、なすでもピーマンでも62回くらいは農薬をするので、消費者と生産者がすごく分かれたこれまで社会が作られていたということが問題だったとおもうし、そういうことを考えると共産党が強い京都だけではなく北海道にも作る側に回れるとかすごくいいところがあるんだろうなと気がました。で私も支援できれば避難してきた方移住してきた方と一緒にやりたいなと思うんですけど、いかんせん必ずしも当事者ということではないので、あまり桜台団地をぶらぶらするというわけにいかないのかなと思ったんですが、まあ生活者であるということで原発事故の当事者ではあるとおもうので、先ほど宍戸さんがいっていたなかで、裁判にすることでくくりがすごく楽になったというお話がありましたよね。で、もうすぐですか。ぜひ裁判の話をしていただけると勉強になると思いますのでよろしくお願いします。

＜宍戸＞裁判なんですが、第6回原発事故損害賠償北海道訴訟第6回口頭弁論が12月16日になっております。北海道地裁の802法廷かな。とにかく10時までに地裁のロビーに来ていただければ人数がすくなければ全員傍聴できますし、人数が多いようでしたら抽選になります。訴訟を起こして楽になったというのは、結局、原発事故にやられっぱなしでないんですよ。原発事故に対して自分が何かアクションをするということで、耳をふさいでいるとどんどんつらくなるだけで、重たいものを手でポットやったらちょっと楽になるかもしれないじゃないですか。だから受け止めるだけではなく、むかっていくことで力がわいてくるんですよね。私は訴訟を起こして良かったとおもっているし、全国で10何か所訴訟おきていますので、良かったら傍聴行ってください。裁判を起こすのはお金のためだけではなくて裁判の過程で何が悪かったのか、この事故はどういうことだったのかを明らかにするということで、それこそ公害裁判ですからこれから何１０年かかるかわかりません。賠償されるかもわかりません。賠償されても僅かかも知れない。お金の問題ではない人間としてのプライドの問題だと思います。やられっぱなしでいるのはいやです。だから今緒裁判を闘いぬきます。

＜質問＞私の町内会は、福島の原発から100キロメータくらい離れた栃木県に小学生の子ども二人の4人でくらしていたんですけどね、やっぱりホットスポットになっちゃいましてね。放射能を測ると結構高かったんです。そこでしばらくくらしていたんですが、食べるものとか外の濃度とか非常に精神的なストレスが大きく結局6月には母子は四国のほうに移住しちゃいました。7年間、長男は栃木の工場で働いていました。月に1回くらい四国に行くような生活をしていましたが、どうしても離れるとどうしても家族関係も希薄になり、夫婦関係もあやしくなって2012年の1月に四国に行くことを決断しまして6月に四国に移住しました。今は四国で放射能を気にすることなく、子供たちも部活動なんかをし安心して暮らしています。消防団に加わって農業なんかをしています。福島の指定区域ではないけれどもかなり離れたところ自主避難をしています。多分、避難者の中にカウントされないとおもいますが、そういうこともありますと紹介したいとおもいました。

＜家田＞ありがとうございます。一応ここで閉会としたいと思います。今日のお話のなかで、避難者としてではなく地域の住民として暮らしていく部分がこれからそれが大事であろう。最後の西山さんのアピールにもありましたけれど原発事故は我々の問題であって避難してきた人もそれを受ける人も実は同じレベルで地域なら地域でおなじ住民として何をしなければいけないのか、そういう意味では全く同じなのだ、あえて区別する必要はないというのが今日一番大事なメッセージではなかったかと思います。もうひとつは、むしろ避難者の方が来てくれる、そこで活動する中で、受け入れた方も地域が活性化すると、新しいそういう活動が始まって、新しい方が来られてよりより一層活性化する力になるのではないか。北海道は元々、元々というとへんですが、アイヌの方がいらっしゃいますが、新しい方がこられて、北海道の力になっていく、それは北海道だけでなく、よく考えると全国そうだとおもうのですが、常に新しい人を受け入れて全体としていかにして地域が強くなっていくかという視点で考えることが必要だとおもいました。体験を共通のものにしていくんだと、福島の体験を共有していくことが大事だということをおしえていただいたと思います。本当にありがとうございました。